



埼玉県では今なお様々な
伝統産業が受け継がれています。
人々の生活を守り、
支えてきた伝統の技。

そして今、そこに住む人たちに
よる新たな挑戦が始まっています。

その技術や文化にふれて、
もっと深く埼玉の魅力を
感じてみましょう。

MADE IN SAITAMAの
技術は意外と身近なところで
使われているかもしれません。

今に息づく 埼玉の 伝統産業



花びらの1枚1枚まで繊細に
表現された細川紙の花



加工によって布のような風合いにも
なる手漉き和紙

細川紙

《東秩父村・小川町》

和紙に宿る
美しさを伝えて

東秩父村と小川町の手漉き和紙の歴史は、およそ千三百年前に遡るといわれ、中でも最高品質の「細川紙」の製作技術は昭和五十三年に国の重要無形文化財に指定されています。さらに平成二十六年には、石州半紙、本美濃紙と共に手漉和紙技術がユネスコ無形文化遺産に登録され世界に認められました。

細川紙は国産楮のみを原料に使うため強靱さがあり、素朴ながらつややかな光沢を持つのが特徴です。今でも書道の半紙や和傘、提灯など和を感じる製品に使用されています。

現在、東秩父村では、平成二十八年

にオープンした「道の駅 和紙の里ひがしちちぶ」を中心として、和紙を始めとする特産品の販売や、和紙漉き技術の見学、和紙づくり体験を通じたPRに力を入れています。さらに村では細川・大河原和紙技術者研修生支援事業を行っており、移住を視野に入れた若手研修者を積極的に育てています。

「かつての東秩父村では、当たり前のように行われていた和紙づくりの風景を、地域の記憶として残していきたい」と語るのは、東秩父村で細川紙のPRの推進など地域活動を行っている西沙耶香さん。東秩父村で三年間地域おこし協力隊を経験し、現在は地域



東秩父村出身の西沙耶香さん

コーディネーターとして、東秩父村を拠点に、和紙漉き職人や作家、行政や民間企業と連携しながら、細川紙のPRと和紙フラワーなどの商品開発を行っています。

「時代が変わっても、その土地らしさを人々の心の中に種として残し、次世代へ繋いでいきたい」と語る西さん。県内唯一の「村」では地域の伝統を受け継ぐ取り組みが息づいています。

道の駅 和紙の里ひがしちちぶ
秩父郡東秩父村大字御堂441
※各施設によって営業時間などが異なります。
詳細はHPをご覧ください。
<http://www.higashichichibu.jp/hosokawashi/washinosato>



西川材 《飯能市》

木と一緒に
生きていく

飯能を中心とした地域は土壌や気候がスギやヒノキの生育に適し、古くから林業が盛んです。江戸大火の復興にも使われたこの木材は、江戸の西方の川からくる」という意味から「西

川材」と呼ばれるようになりました。いま、この西川材が再び注目を集めています。

西川材の特徴はその色艶と年輪の緻密さ、節の少なさ。西川材のプランナ

ーとして活躍する浅見有二さんはNPO法人西川・森の市場を主体に、オリジナル家具などをプロデュースしています。「本物の木で作った製品を手頃に提供し、良いものを長く使うという心地よさを伝えたい」と話す浅見さん。育林、伐採、加工を経て製品となる西川材。地域の人々の思いがたくさんつまった西川材は、私たちの生活に今も温もりを与えてくれています。



「西川材を身近に感じてほしい」と語る浅見さん



ショールームの外に積み上げられる伐採後の西川材から、さわやかな木の香りが漂います



NPO 法人西川・森の市場
西川材ショールーム
飯能市虎秀45
042-980-7745
※見学詳細はお問い合わせください
<http://www.morinoichiiba.net>

武州正藍染 《羽生市》

世界にはばたく
羽生の「藍」



羽生市では江戸時代後半から藍染技術が伝わり、最盛期には市場が立つほどであったといえます。やわらかい着心地が特徴で、剣道の道着やお祭り着などのイメージがある藍染。百四十年余の歴史を誇る小島染織工業では、現社長の小島秀之さんの発案で、伝統を生かしつつも、「若い世代にも藍に興味を持ってもらいたい」とプロダクトブランド「KASE by KOJIMA」を発売。藍染のシャツやバッグ、インテリアグッズなどを販売しています。同社の藍染は、フランスの高級ブランドにも使用された実績もあり、羽生の伝統的な藍染技術は世界に認められています。

小島染織工業株式会社
(小島屋ショップ)
羽生市大字神戸642-2
048-561-3751
※来店前日に電話にて予約をお願いします。
火・水・木曜日
13:00-17:00のみの営業
<https://www.kojimasenshoku.com>



糸の芯までこだわって染めるカセ染めから独特の風合いが生まれる

足袋 《行田市》

足袋から始まる
オンリーワンのまちづくり

戦後の洋装文化の波に押されていた行田市の足袋産業。人気ドラマ「陸王」で大きな注目を集めました。以前から、NPO法人ぎょうだ足袋蔵ネットワークを中心とした人々が足袋文化を広めるべく、活動をしていました。「まずは住人に街のことを知ってもらいたい」という思いから、工場をリノベーションした博物館や体験施設を運営。MY足袋づくりが人気となっています。「オンリーワンのものってなんだろう？ から始まったまちづくりです」と話すのは、同団体の理事朽木宏さん。地道な取り組みが実り、今や博物館には市外からも多くの人が集まります。



熟練の技術を間近で体験できる



県内初の日本遺産にも指定された「足袋蔵のまち行田」

足袋とくらしの博物館
行田市行田1-2
048-552-1010 (まちづくりミュージアム)
10:00-15:00
土曜、日曜のみ開館 (夏季・冬季に一時休館あり)
<http://www.tabigura.net/tabihaku.html>